

週刊 武四郎

第7号

2018年(平成30年)5月23日(水)
発行・松阪市

●毎月第四週は、
松浦武四郎のコレクション
についてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

はじまりは……鈴？

武四郎さんが生まれた伊勢の国……その松阪には、有名な本居宣長という偉人がいます。

時代的にはかぶりませんが、武四郎さんの叔父さんは、その門人だったといえます。武四郎さんより一世代前の人なんですね。でもまだ同時代人だった人がいた時代、ということですよ。

武四郎さんの古物蒐集のはじまりは、さて実際にはわかりませんが、〈記録〉が残っているのは十五歳の頃からのようです。ひとつは4月25日号にも書いた延命寺物産会での古銭、そしてもうひとつは〈鈴〉です。

宣長さんといえば、〈鈴屋〉。本居宣長記念館の〈宣長さんの鈴〉の部分を用いましょう。「宣長の鈴」と言えば、書齋に掛けられた柱掛鈴ですが、宣長さん遺愛の鈴として、「柱

掛鈴」のほかに、「駅鈴」、「十字鈴」、「茄子型古鈴」、「養老鈴」、「鬼面鈴」、「鉄鈴」、「八面型古鈴」……

本居家に伝わったそれら七つの鈴を「七草鈴」と呼びます。

松阪の豪商長谷川元貞という人が、この宣長さんの古鈴を写した絵を持っていたので、十五歳の武四郎少年は頼み込んで写させてもらっています。現在武四郎記念館に、その時筆写した図が残っているのです。掲載図は人(鬼?)の顔のような鬼面鈴です。奇妙な鈴ですね。武四郎さんは、よほどこの鬼面鈴がお気に入りだったらしくて、のちに長じてから本物の鬼面鈴も入手しています。『撥雲余興』という武四郎さんの古物コレクションにカタログにも、絵師の河鍋曉斎がその鬼面鈴を写した図

が掲載されています。実物は現在、東京の静嘉堂文庫美術館に収められているのですが、同じ静嘉堂にある武四郎さんが蒐集した八角鈴は伊勢の国の古墳から出てきたものだとか。

伊勢の国は歴史が古いので、

大雨で土砂が流れると埋蔵物が出てくることもあり、他の土地よりもずっと古いものが身近にある環境だったのかもしれない。それにしても今の感覚だと、十五歳の少年が古鈴に興味を持つって、さうとうシブい趣味だと思ってしまうが……。



▲「古鈴図」松浦武四郎筆 天保3年(1832)
国学者本居宣長が収集した古鈴を写した絵を、松阪の豪商長谷川家の八代目当主元貞(六有齋)から見せてもらい写したもの。この時、武四郎は15歳であり、現存する武四郎の自筆資料の中では最も若い頃のものとなっている。(松浦武四郎記念館蔵)

松浦武四郎 (1818～1888)
三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。

